

高齢期の学習課題としての死への 教育に関する一研究

小 池 茂 子

(青山学院大学大学院)

はじめに

人口の高齢化の問題は、我が国において今日的にも将来的にも大きな課題であり、行政施策の上にも大きな影響を及ぼしている。その中で高齢者教育の担ってゆかねばならない課題は二つに大別される。第一は対社会的課題であり、第二は高齢者個々人に関する課題である。対社会的課題とは即ち、「高齢化社会」や「高齢者」をペシミスティックに捉える社会の風潮をオプティミスティックなものに変えていく役割を担うという問題である。那須宗一の指摘を交えて説明すれば、人々が高齢化社会を①生産力低下②経済成長の後退③保守的支配体制の強化④社会的地位の交替延長をもたらす社会として捉え、その結果「老い」を醜悪なものとして嫌悪し恐れる社会の風潮を排し、社会的公正の価値体系や文化生活のプライオリティの再認識の中で高齢者を捉えることができるよう、高齢者の側から社会に対して働きかけていくことの必要性を説き、そのための援助を行っていく事が高齢者教育が担う対社会的課題であるといえる。

更にもう一つの課題は、高齢期にある人々そのものへのアプローチである。今日、平均寿命の著しい伸びが報告されているが、その中で人々は自らの高齢期をどのように生きるかという大きな命題を携えて生きる事を余儀なくされるようになった。しかし今日の社会では、社会的に「老い」の価値はおとしめられ、「高齢期」が「喪失期」として位置づけられるようなネガティブな見解が一般化されている。高齢者も「自分はもう年寄りだから」という諦念を抱き高齢期の生き方に積極的な意味を見い出せない者もいる。このような状況を稲生勁吾は「社会が老いを否定し、高齢者自身も自らを否定してしまっている二重否定の構造」と表現するが、その中で高齢者教育が個人に対して果たすべき役割は、高齢者自らが何

らかの意義づけを持ち、高齢期を積極的に生きていく為の価値観を獲得できるよう援助することにある。今日、高齢期を幸せに過ごすための生活規範としては「活動理論(activity theory)」即ち、高齢期も自らの生活の場を狭めず、積極的に様々な活動に参加し諸欲求を満たす事が望ましい。という理論が老年学者達によって支持されている。我が国でも、この活動の理論に根差した形で様々な施策が実施されている。「生きがい」の問題が老人問題の中で取り上げられ「生きがい対策事業」も盛んである。高齢者教育も「生きがい」を感知し得る資質の育成と能力の開発という役割を担うものである。しかし今日の高齢者を対象とした事業に対し、森幹夫は次のような批判を投げかけている。「我が国で老人の『生きがい』といわれる時、どうもいつもそこには一つの価値観が予見的に先入しているような気がしてならない。というのは『生きがい』というのはどうも『何かを』することを言っているような気がするからである。逆に言えば『何も』しなければ『生きがい』とは言わないような考え方があるように思われる。……昨今流行の『生きがい』活動も、つまるところ、この孤独感を一時的に忘れさせ、またはまぎらわせる程度のものに過ぎないのではないだろうか。……それは単なる対症療法のように思えてならない」このような彼の指摘には、今日の「生きがい」活動事業に対する批判が込められている。即ち「生きがい」活動事業が単に高齢者の余暇の活用と無為の克服という表面的な生活時間を満たす事のみを問題とするのであってはならないという事である。

神谷美恵子は「生きがい感」を「幸福感」と区別して次のように説明している。「第一に『生きがい感』には『幸福感』の場合よりも一層はっきりと未来に向かう心の姿勢がある。第二に『生きがい感』のほうが自我の中心にせまってきている。第三に『生きがい感』には意識的にせよ無意識的にせよ価値の認識が含まれていることが多い。⁽⁴⁾」神谷の論述から「生きがい感」というものは個人の自我感情の中に或る価値観を伴って形成されている、又、形成されるものであると言える。更に日高幸男においては、「生きがい感」は「生きる喜びといったものに通ずる感情的充実」と「生きる価値を問う知性的認識」から成り立つと説いている。⁽⁵⁾

今日の高齢者教育においては「高齢者を楽しく学習させるという配慮から『お守り型学級』になっている……そのため娯楽・レクリエーションが大半を占めている場合がある」⁽⁶⁾との批判が加えられる程に「楽しみ」の追求が盛んになされている。このような状況がある一方で「加齢による身体的な衰えが、高齢者の生活の場を縮小させ、その結果として高齢者はひがみっぽくなり、自己の中心に心の虚しさだけを感じるようになり、自己を孤独化させてしまう。更にそこから生じる『憂い』が老化を助長するという悪循環をきたす。⁽⁷⁾」という老いの現実がある。

この点から考察すればヤングオールド期の人々を対象とする高齢者教育の課題は、高齢期の楽しみや美しい点のみに目を向けるのではなく、高齢者が一切の否定である死を前にして直面する諸問題について正面から取り組み、それによってE・フロムのいう「在る (to be)」ことにおける生き方を、日高のいう「生きる価値を問う知性的認識」を、神谷のいう「未来に向かう心の姿勢・価値の認識」を高齢者が自らのものとするのが可能となるよう援助する学習機会の提供を充実させることだといえる。

このことを可能ならしめる為に、喪失期といわれる高齢期にある人々に対し、喪失の最たるものである「死」の問題を取上げてとりあげ、筆者は高齢者教育において「死を正面から見すえ、死について学ぶことによって、よりよく生きること」を学ぶ」という目的をもった「Death Education」の試みが必要であると考えた。以下、高齢期の学習課題の設定を通し「学習課題としての死への教育」の必要性について論じてゆきたい。本論では、そのために、第一として高齢期の必要課題設定において、肉体的生命を充実させる視点のみでなく、精神的生命の充実を図る視点が重視されなければならないことを述べる。第二として、高齢期に特に高まりを見せる学習要求として「心の健康」「精神の健康」に属する項目が挙げられる事を指摘し、「楽しみ」や「肉体的健康」と共に高齢者においては内面生活の充実を求める現実があることを明らかにする。第三に現行の高齢者教育で行われている学習内容を調査した結果を用い、取り組みが不足している学習課題について明らかにする。そして第四に、第三で挙げた学習課題を体系的に学ぶために「死の教育」の必要性を説き、高齢者教育における「死の教育」の試論を掲げ、この試みが高齢者教育に貢献するものであることを述べ結論とする。

1. 高齢者教育における必要課題の設定

成人教育に限らず、あらゆる教育には達成されるべき課題がある。学習者が自発的に学びたいと積極的・意識的に要求する内容が学習要求ないし、要求課題であるのに対し学習者が自ら学びたいと意識していなくても学ぶ事が必要であると認められる必要課題がある。今日の公的社会教育の存在理由の一つは、人々の学習ニーズに応えながら、この必要課題について学ぶ機会を人々に提供する事にあるといえよう。ここでは必要課題設定の視点から、人々が高齢期の生活へ適応を図ることが可能となる事を援助する目的を持った高齢者教育において、自我の内面的な生活に関わる課題が採り上げられることの重要性について述べたい。

表1は、以下の学者達が「高齢期」に克服されなければならないとして掲げた

・自分の年頃の人々と明るい親密な関係を結ぶこと	・肉体的な力と健康の衰退に適応すること	・社会的、市民的義務を引き受けること
・収入の減少に適応すること （余暇の享受） ・均整のとれたレクリエーション計画をたてること ・新しくレクリエーションの技術を身につけること ・新しい趣味が発見すること ・同年齢の人々との親交を確立すること	（健康） ・自分の貯えを維持すること ・ストレスを処理すること ・を学ぶこと ・賢く薬品を使用すること ・適当な運動をすること ・定期的に医療検査を受けること ・過度に走らないこと ・体力と健康の衰えに適応すること	（地域社会生活） ・地域組織の結びつきを維持すること ・ボランティアサービスをすること ・高齢の人々の健康状態改善のために働くこと
・「肉体の超克(Body Transcendence)」対「肉体の固執(Body Preoccupation)」 （肉体の時の流れに従って衰えてゆかざるをえず、精神的なものに見い出さない限り、幸せな適応は非常に困難である）		

(表1)

(Havighurst, R.J.)	(Knowles, M.S.)	(Erikson, E.H.)	(Robert C. Peck)	(Barbara M. Newman) (Philip R. Newman)
・引退と収入の減少に適應すること ・配偶者の死に適應すること ・肉体的な生活を満足に送れるように準備すること	(人間形成) ・死に備えること ・新しく将来の見通しを發展させること ・新しい自己同一性を発見すること ・広い心をもっていること ・風采をきちんとしていること ・好奇心を失わないこと ・若い人々との接触をもつこと ・現代的であること ・自分の意欲を保持すること ・常に将来を志向すること ・自分の価値を再吟味すること ・加齢の過程を理解すること ・不足している能力に代わる能力を發展させること (職業) ・社会保障、医療、福祉について理解すること ・役立つ新しい道を発見すること ・退職に適應すること (家庭生活) ・財産を整理すること ・新しい親しい関係を確立すること ・係との関係を保つこと ・一人で生活することを学ぶこと ・配偶者の死に備えること ・新しい生活を確立すること	「統合対 「絶望・嫌悪」 (自分のただ一つのライフサイクルを受け入れること)	・「自我の超克(Ego Transcendence)」対「自我の固執(Ego Preoccupation)」 (人生の適應課題の最後は、自分の死に対する適應である。)	・死に対する見方の発達 ・自分の人生の受容 ・新しい役割りとエネルギーの再方向づけ

課題を一覧表にしたものである。

- ① ハヴィガースト (Havighurst, R. J.): 老年期の発達課題⁽⁹⁾
- ② ノールズ (Knowles, M. S.): ハヴィガーストとの発達課題を改訂して設定した成人後期のライフ・プロブレム⁽¹⁰⁾
- ③ エリクソン (Erikson, E. H.): 成熟期の心理的発達課題⁽¹¹⁾
- ④ ペック (Robert C. Peck): エリクソンの説に、ア) 体力的衰えの視点、イ) 性的衰えの視点、ウ) 情緒的柔軟の視点、エ) 精神的柔軟の視点、オ) 職業に対する態度、カ) 健康に対する態度、キ) 死に対する態度、から検討を加え、設定した心理的発達課題⁽¹²⁾
- ⑤ バーバラ (Barbara M. Newman) とフィリップ (Philip R. Newman) ニューマン: エリクソンの説を深化させ設定した成人後期の発達課題⁽¹³⁾

これらハヴィガースト、ノールズ、エリクソン、ペック、ニューマン夫妻によって設定された「高齢期」に克服されるべき課題は、高齢期の必要課題設定において示唆を与えてくれるものであるが、ここで「必要課題分析の理論わく」としての新堀通也の指摘を採り上げたい。彼の「必要課題分析の理論わく」の論述の中で興味深い点は、個人の life における必要課題を設定する視点として、従来のタテのライフ (ライフ・サイクル、生活周期)、ヨコのライフ (ライフ・スペース、生活空間) に加えてライフの層 (ライフ・レベル) を設定した点である。彼はマックス・シェラー (Max Sheler) などの説により、個人のライフのレベルを「生存」「生活」「生命」の三層から捉え次のように説明している。

(1) 「生存 (肉体的・生物学的生命) のレベル: 人間が生きていく上で最も基本的な肉体的な生活を維持成長させるという課題、即ち健康、体力、栄養などに関する課題。

(2) 「生活」のレベル: 動物としての人間の肉体的生命保持のレベルが充足された上に求められる快適さというものが加えられた段階、所謂、実生活ともいうべき段階。

(3) 「生命 (精神的・哲学的生命) のレベル: 人間のライフには肉体的生命だけでなく精神的生命があり、人間は人格である以上、精神的、霊的、内的生命の充実を必要とする。たとえ肉体的生命という点では劣っていても、高貴な精神生活を持つ人は多く、人格・道徳・教養・宗教・文化などは全てこうした精神的生命の成長、向上、充実、深化に関係する。

新堀はこの個人のライフの精神的、哲学的レベルに関する課題を人格課題として設定し、更に「生きがい」や「生きる目標」はこの人格課題に関わるものであると指摘している。又、現代は外面的な生活は寿命の伸長、物質文明などの隆盛

などにおいて一見充実しているかに見受けられるが、それに反して精神的にはむしろ生きがいの喪失、人間疎外、無価値感の広がり等の不満が人々の心をむしばんでいる時代であり、この人格課題こそ今日における最も本質的で重要な課題であると述べている。

この指摘は、高齢者が幸せに年をとる事は常に活動的な生活を営む事や、静かに誰にもわずらわせられずに生活を営む事で達成されるものでなく、高齢者自身の人格のあり方に由来するのだというリッカードらの主張⁽¹⁵⁾に通じるものといえよう。これらの主張では、高齢者が高齢期の生活に「適応」（個人が自己内部の欲求や外部社会の要請に順応して精神的に生き残ることを意味する）できる人格を涵養することにおいて高齢期の幸せが実現されるという。そしてこのことをエリクソンは、円熟期における自我統合として自己の唯一のライフ・サイクルを受け入れられる英知を獲得していくことであると述べている⁽¹⁶⁾。更にこのエリクソンの説をニューマン夫妻は次のように詳細に説明する。「円熟期における自我統合とは、自己の人生という事実を受け入れ、死に対してそれ程の恐怖心を持たずに立ち向かうことのできる能力を意味している。」⁽¹⁷⁾これらの主張からも、高齢者教育においては、外面的な生活を充実させる取り組みだけでなく、高齢者が精神生活の面において、生活に適応が図れるよう援助をなしていくこと、即ち人間存在の本質に関わる問題についてむしろ配慮がなされなければならないといえるのである。

そこで筆者はこの新堀のいう人格課題が高齢者教育の必要課題としてクローズアップされなければならないとの考えから、敢えて個人における必要課題を新堀の指摘した1)生存のレベル、2)生活のレベル、3)生命のレベルという三つの段階に分けて設定した。又、社会の側から人々に学習が要請される課題についても筆者は新堀の提示した必要課題設定の視点をとり入れて設定した。表2は、筆者が表1で採り上げた学者達の説や、その他、高齢期の学習課題に関する先行研究を参考に設定した高齢者教育を考える上での必要課題である。

表2にみるように学習課題設定において「必要課題」というものは不可欠な要素である。しかし成人の学習が最終的に目指すものは「自己学習」の理念であるというように、学習者の学習意欲、関心、学習者の望む学習の形態方法によって学習するという自由な学習こそが学習者の個人差に応じた学習としてふさわしいのである。従って教育として行われる高齢者教育の場合も必要課題のみが一方向的に強調されるのであってはならず、学習主体である高齢者の学習要求が学習内容に反映されなければならない事はいうまでもない。

先の必要課題設定にあたっては高齢者教育の課題として精神的、哲学的な内面生活の充実についての課題がこれからもっと重視されなければならないと述べた

表 2

【1】個人の life から捉えた必要課題

(1) 生存のレベルにおける課題 (肉体的, 生物学的課題)

・高齢者の身体の特性の理解と適応

(高齢期の身体の変化についての正しい知識を知り, 予防法や適応法を考える)

・健康管理

(心身ともに健康に生きるために, 老人病, 精神障害に関する知識や栄養, 睡眠, 薬など健康管理について総合的に学ぶ)

・適度な運動についての理解と実践

(高齢者が毎日の生活の中で手軽にできる健康運動について学び, 実践する)

・高齢期の性の理解

(高齢者の性と生理について正しい理解を得る)

(2) 生活のレベルにおける課題 (生活課題)

①家庭生活

・現代社会における「家庭」についての理解

(新民法, および現代の経済, 社会の変動による家族形態, 機能の変化を正しく認識し, 「家庭」とは何かについて理解を持ち, 高齢期の生活を送るのに役立てる)

・家庭における人間関係の見直し

(家族員が抱える歴史的背景の違いや, 置かれている立場, 役割を改めて見つめ直すことにおいて, また親子の別居, 同居問題について考え, 現代の家族がかかえる問題を合理的に見つめ直す)

・ひとりぐらしの生活設計の確立

・家庭における高齢者の役割についての理解

(高齢期の危機状況として「無為」ということがらが挙げられる。家庭の中における高齢者の役割について考え, 生活にはりをもたせることを学ぶ)

・収入の減少に適應する為の高齢期の生活設計の確立

(「家族構成の変化」「社会保障」「医療制度」「社会福祉」などにについての理解を深め, 高齢期の生活設計を捉える上で役立てる)

②余暇の充実

・余暇時間の活用を図る

(高齢者が日常の生活をより豊かに過ごすための具体的な方法について学び, 余暇時間について主体的に考える態度を身につける)

・豊かな教養, 趣味ある暮らしについての理解と実践

・同年齢の仲間との親交の確立

(どうしたらよりよい人間関係がつかれるかを学び, それを仲間との交際に生かし, 交友の輪を広げる手助けをする)

・余暇資源についての情報入手

③高齢期の職業

・新しい「仕事」観の確立

(高齢期の能力を活用するための制度を学習し, 高齢期において役立つ新たな道を発

見すること)

- ・再就職のための技能の習得
- ・退職後の生活のとらえ直し
- ・仕事にかわる新しい役割りの発見

(家庭における役割りを新たに発見し、自分の生活時間をとらえなおすためのきっかけを見出す)

(3) 生命のレベルにおける課題 (人格課題)

- ・自分の人生の受容

(高齢期になると、それまでの人生(結婚、育児、仕事等)に関してその成功や失敗が明白となる。このように十分なデータをもった高齢期にあって、人はそれまでの人生における失敗とか危機を強調するのではなく、過去における出来事についての意味付けを再考し、新たに価値づけていくことによって、それまでの人生を自己の自我像の中に包摂できることを学ぶ)

- ・「衰退」に立ちむかう精神力の確立
(パーソナリティの「円熟」をめざす)

「肉体的機能が衰えてゆく日々の中にあっても、人の持つ精神力が、その人の生活を良くも悪くも変えていくことについて学び、「老い」に立ちむかっていく姿勢を見出し、してゆくことの重要性について理解する)

- ・「死」に備え、今ある「生」をよりよく生きる

(いかにして死に備え、前向きな姿勢で生きてゆくことができるか、いかにして未解決の問題について決着をつけるか、残される家族の為に何をなすべきか、親しい人々とどのように人生の完成期を関わっていくか等について、アドバイスや話し合いを通して、個々人なりの解答を考える)

【II】社会生活の側面から捉えた必要課題

(1) 歴史課題

- ・急激な現代社会の動きについての理解

(急激な社会構造の変化に対応するために、政治、経済、社会情勢についての正しい理解を得ることにより、高齢者の生活のあり方を考える)

(2) 地域課題

- ・市民生活の自覚の促進

(区市町村の行政のしくみなどについて理解を深め、一市民として社会のために何ができるかを考え、地域社会に目をむけて生活することがいかに大切かを学ぶ)

- ・地域づくりへの参加

(高齢者の視点において、自分達を取り巻く地域社会環境を住みやすく健康なものとしていくにはどのようにしたらよいかについて学び、ゆたかな町づくりの原動力となるために高齢者が果たす役割りについて考える)

- ・地域でできるボランティア活動についての理解と実践

(ボランティアの目的や意義について学び、助けを必要とする仲間に奉仕することへ

の理解を深めると同時に、実際、高齢者ができるボランティア活動について紹介をする)

(3) 文化課題

・地域の歴史、文化への理解と伝承活動

(地域の歴史、文化財、祭りなどについて学ぶことによって地域への愛着を深め、芸術、文化の保存、伝承に果たす高齢者の役割を具体的に考える)

・他世代の人々との交流

(他世代がどのような価値感をもって、高齢者に何を求めているのかを学び、かつ高齢者がもつ知恵や経験で現代において伝える事は何か、また伝えなければならないものは何かについて考える)

・「高齢者文化」の創成

(趣味に生き、教養を高め、スポーツ、レクリエーションに関する知識と技術を身に付け、それらの活動内容を「高齢者文化」として醸成し、創成するよう努める)

が、次に二つの研究をとりあげ、高齢期において高まりを見せる学習要求から、このことについて更に述べていくことにする。

2. 高齢者の学習要求

高齢者の学習要求については、様々な研究がなされているが、ここでは敢えて、昭和57年 NHK 放送文化研究所が全国の成人3000人を対象として実施した学習関心調査の結果を基に、山本恒夫が提出した論文⁽¹⁸⁾と、兵庫県嬉野台生涯教育センターと国立社会教育研究所(当時)が共同で行った調査にみる高齢者の学習要求についての報告から検討を加えたい。これらの研究報告を採り上げた理由は、両研究において、高齢者のみを対象として調査した結果を用いて高齢期の学習関心を順位づけをせずに、向老期にある人々が抱いている学習関心と高齢期にある人々が抱いている学習関心を比較した上で、高齢期において特に高まりを見せる学習関心を捉える事においてこそ、高齢期特有の学習関心を把握できるという前提が貫かれていたからである。

これらの前提をふまえたうえで山本恒夫は、60代、70代になると学習希望率が高まる学習内容について以下のように抽出している。

(1) 身体的健康の保持にかかわる項目

「成人病の予防」「自然食品」「健康食品」「体操」等

(2) 内面的・精神的な生活の充実にかかわる項目

「宗教・信仰」「こころの健康」等

(3) 芸術・美術・趣味にかかわる項目

「民謡」「俳句・短歌・川柳」「美術（知識と鑑賞）」

(4) 体育・レクリエーション

「ゲートボール」等

もう一方の研究、(嬉野台生涯教育センターと国立社会教育研修所(当時)の共同研究)は、向老期(41歳～60歳)にある人々と高齢期(61歳以上)にある人々の学習参加要求度を調査し、これらの比較において高齢期において特に高まりを見せる学習要求について越川正三が次のように分析している。

高齢期においては、「社会的視野(具体的には社会参加や社会変化の理解)」「人間性(趣味や教養)」「親睦(人間関係や世代間の交流)」の三分野とも向老期の学習参加要求度に比べて低下している。これに対し「健康」の分野(身体¹⁴⁰の健康・精神の健康)での、「精神の健康」対してのみ学習参加要求度が高まっている。この分析結果から越川は、高齢期の学習の最終目標は人生の終期における「精神の健康」におくべきであると結論づけている。

これら二つの報告から高齢者は、1) 身体¹⁴⁰の健康、2) 精神生活の充実、3) 実的な楽しみを望んでいる事が読みとれる。

そして越川によれば、高齢者は肉体的な健康よりも精神の健康を強く求めているという。ここに生物学的には衰退の方向をたどるとしても、それを補うものとして充実した心の拠り所を維持してゆきたいという高齢者の切実な願いを読みとることができるだろう。このことは、新堀通也が必要課題設定の視点として掲げた「精神的・霊的・内的生命の充実」という人格課題に関わる問題といえる。

高齢者の教育を考える場合、我々は次の事柄に留意しなければならない。即ち、「楽しみ」がなければ人は感情のレベルにおいて虚しさを感じる。しかし高齢者の日常生活がいかに楽しい事柄で満たされているようにも、高齢者自身において生きることについての根源的価値観が確立されていなければ、真の「生き甲斐」は獲得されないということである。日常生活の楽しみで、人間の根源的な不安である問題、「死」は解決されないのである。

このことを実存主義哲学者ガブリエル・マルセルは次のように説明している。「希望には日常的希望と根源的希望がある。日常的希望は、日常生活の具体的に向けられるものであり、これに対し根源的希望は、人々の実存、人の人格それ自体に結びついている。根源的希望において問われるのは、人が未来に対し、つねに肯定的な態度で臨んでいるか、どうかである。……このことは度重なる失敗にもかかわらず人生全体を意義あるものとして捉え、未来を肯定的に望むことがで

きるかどうかにかかっている。」²⁰ 根源的希望（神谷のいう「生きがい」）は、日常的希望（神谷のいう「幸福感」）よりも、一層はつきりと未来に向かう心の姿勢があるという点に大きな意義がある。

しかしながら、多くの高齢者にとって未来に向かう心の姿勢を阻む現実がある。これは「死」という現実である。process of loss ともいわれる高齢期の喪失の最たるものが「死」という現実を前にして、全ての価値が虚しいものとされてしまうならば、高齢期の生活における生きがいは到底、見出し得ないといえる。「死」というものが、日常生活の中においても実感として重くのしかかってくる高齢者にとって、残された自分の人生をいかに生きていくかという命題は、人々の精神生活に大きな葛藤をもたらすものである。だからこそ高齢期の学習参加希望の項目として「心の健康」「精神の健康」が強く求められるといえるのではないだろうか。

それゆえに、死という問題について正面から見すえ、死について多岐にわたる角度から学び、よりよく生きる事を学ぶという学習、即ち Death Education が高齢者教育の中で実施される必要性が出てくるといえるのである。

3. 今後の高齢者教育の場において取り組みが必要とされる学習課題

これまで①高齢者教育の必要課題を設定し、②高齢期に特に高まりを見せる学習要求を見る中で、高齢者教育においては、人々の外面的な生活を充実される施策だけでなく、新堀のいう人格課題、即ち精神的・霊的・内面生活の充実に関する課題が、重視されなければならないと主張してきたわけであるが、次に実際の高齢者教育の場においてはどのような学習内容が採り上げられているか明らかにすることとした。そして、このことを通して、精神的・霊的・内面生活の充実に関する課題への取り組みが不足していることについて触れ、今後の課題とする必要があることを述べた。

高齢者教育の現実で実施されている学習内容について調査する目的のため筆者は、昭和58年に実施された高齢者教室88ケースについて採り上げた。この際、使用したデータは国立教育会館社会教育研修所に全国の地方自治体から送付されてきた高齢者教室・学級などの事業報告書である。尚、学習内容の分類の枠組みは、現、国立教育会館社会教育研修所が作成した「高齢者教育の領域例一覧」と、東京都教育庁社会教育局が設定した枠組みを参考に筆者が設定した。分類結果は表3の通りである。

表3 昭和58年度地方自治体が実施した「高齢者教室」等で取り上げた学習内容一覧表

	学 習 領 域	学 習 内 容	A	B
1	身体健康安全	①老化と身体の変化 ②病気とその対応 ③栄養と食生活 ④安全 ⑤保健管理 ⑥運動の効用 ⑦その他	79	163
2	心の健康(1コースの教室で平均1.7回とりあげられている)	①自立の精神 ②生き方・生きがい論 ③人生と宗教 ④心の健康 ⑤その他	62	111
3	生活基盤の確保	①老後の生活基盤 ②財産・年金等の管理 ③その他	24	27
4	余暇	①余暇のすごし方 ②余暇活動・趣味の実際(スポーツ・レクリエーション、芸術、文化、生産、創造活動)	67	207
5	知的教養に関するもの	①社会科学 ②人文科学 ③自然科学 ④芸術 ⑤その他	44	143
6	家庭の管理	①暮らしの知識 ②独居生活・二人ぐらし ③その他	10	15
7	家族の人間関係	①家庭における高齢者の役割 ②高齢期における夫婦関係 ③(同居)他世代の理解 ④その他	36	44
8	社会の理解	①地域社会 ②時事問題 ③現代日本の理解 ④国際社会の理解 ⑤政治 ⑥その他	55	91
9	友人・隣人関係	①友人・隣人関係 ②コミュニケーション技術 ③その他	8	8
10	社会参加	①地域・団体活動 ②ボランティア活動 ③社会参加論 ④その他	31	39
11	世代間の理解と交流	①各世代の理解 ②交流活動	36	46
12	退職・引退等に伴う諸準備	①退職・引退の心構えとその対処 ②退職計画 ③その他	0	0
13	再就職	①再就職準備 ②職業技術の維持・向上 ③その他	0	0
14	学習活動	①学習活動の意義	13	15
15	福祉	①福祉サービスの知識	23	23
16	郷土の歴史と文化財		60	108
17	その他	・ 宿泊	37	37

(注) 国立教育会館社会教育研修所に収蔵された88市町村の「高齢者教室」の事業報告書より作成した。

A：上記の学習領域に含まれる学習テーマをとりあげた「高齢者教室」の数(88)。

B：上記の学習領域に含まれる学習テーマの延べ実施回数。

学習内容として延べ実施回数が一番多いものが「余暇」の領域に属するものであり、第二位が「身体の健康・安全」の領域、第三位が「知的教養」に関するもので、第四位が「心の健康」、第五位が「郷土の歴史と文化財」の領域と続く。次に延べ実施回数ではなく、より多くの高齢者教室が学習内容として採り上げた領域についてみると、「身体の健康・安全」を79教室が採り上げており第一位であり、次いで67の教室が採りあげた「余暇」の領域、第三位に「心の健康」の領域で62教室、第四位が「郷土の歴史と文化財」で60教室となっている。

上記の結果を「心の健康」の領域から見ることにする。「心の健康」の領域については、比較的どこの高齢者教室でも学習内容として採り上げている事が判明した。しかし高齢者教室の一開期中に平均1.7回しか行われていないことがわかる。学習領域別に一開期中の平均実施回数を捉えてみると「余暇」3.2回、「身体の健康・安全」が2.1回、「郷土の歴史と文化財」が1.8回である。

このことから現行の高齢者教育で実施されている学習内容の主流を占めているのは、だんぜん「余暇」の領域に関するものであり、次いで「身体の健康・安全」の領域であることが明らかである。「心の健康」の領域についてコメントを加えるならば、多くの高齢者教室においてこの領域に関する学習は行われているが、一開期中、何回かに亘って体系的に採り上げられるというのではなく、通り一遍の対応で終わっているといえる。更に「心の健康」の領域に分類された学習内容のテーマを分析したものが表4である。

表4で「心の健康」に属した学習テーマについて分類を試みた結果、「生きがい論」23、「バラ色の人生論」30、「生き方について」13、「信仰・宗教について」21、

表4 「心の健康」に分類された学習テーマ一覧

・生きがいについて ・心のふれあい ・しあわせな老後 ・明るい老後を送る為に ・豊かな老後を考える ・無量寿 ・心の健康 ・生きつづけることについて ・愛される老人とは ・高齢化社会における生き方	・健康と幸せを求めて ・すばらしい老後 ・環境が人を育てる ・心身共に若くあらねば ・くらしに笑いを ・生きがいと老寿の心構え ・老後の生き方 ・生かされている私 ・健康と心構え ・人生を語ろう ・信仰心について	・日常生活と聖の世界 ・生活と宗教 ・宗教と信仰の生活との関わり ・宗教と私たち ・豊かな人間社会と宗教の心 ・宗教と人生 ・老境、環境、信教
---	--	---

「心の健康」12、その他、というように美しい高齢期の生き方に関するテーマが一番多く用いられている。そしてこの調査に関する限り「死」について触れているテーマは一つも見当たらない。そればかりでなく、或る高齢者教室で配布された「人生をいきいきと生きるための考え方」というパンフレットには、第一番目に「まだ生きているうちから死を考えることはまったく無意味である。生かされている間は精いっぱい生きることだけを考えればよい」と印刷されていた。

今日の高齢者教育においては、これまで見てきたように「楽しみに通じる活動をすること」「健康であること」が学習内容として盛んに採り上げられる一方で、高齢期の生き方を論じる場合にも努めて明るい面を採り上げようとして高齢期の孤独の問題や死の問題といった暗い、深刻な問題については敢えて正面から触れられない現実があることが伺われる。

ペックは(Robert C. Peck) 高齢期の生活について次のように指摘している。「肉体は時の流れに従って衰えてゆかざるを得ず、精神的なものに価値を見出さない限り、幸せな適応は困難である。⁽²¹⁾」そこにおいて高齢期の精神生活における究極的な課題の解決が迫られるわけである。

ここで今一度、エリクソンとニューマン夫妻が提出した課題について思い起こしたい。これは1)自分の人生を自己の内に受容できる英知を獲得すること。2)死に対してそれ程の恐怖心を持たずに立ち向かう能力の獲得であった。2)を言いかえれば、死に備え今ある「人生」をよりよく生きる事を可能ならしめる価値の獲得、であるといえよう。ここに提出された課題の克服なくして、高齢期の生活への適応はありえないのである。この課題についてこそ、「体の健康」や「楽しみ」等よりも最重要課題として採り上げられる必要があるといえる。

これまでのような考察を通し、高齢期の学習課題を表5のように設定した。

井上講四が指摘しているように、⁽²²⁾「学習課題」といっても今日において定まった概念規定はなされていない。しかし筆者は、「学習課題」を必要課題と要求課題を考慮に入れた上で導き出される、或る程度の抽象度を伴った教育目標として把握した。課題の領域分けにおいてはノールズと新堀通也の説を参考としたが、先に問題とした「自分の人生の受容」という課題、「死に備えて今ある『生』をよりよく生きる事を可能ならしめる価値観の獲得」の課題は、精神的・霊的・内的生命の充実に関わる課題であるといえる。従って新堀のいう人格課題に結びつくものであり、パーソナリティという領域を設け、そこに位置づけた。

人間の生活は宗数や思索のみによって満たされるものではない。しかし死を控えた高齢期の生活において、この人格の領域に関する課題について学習をする機会を提供することは、高齢者の死にまつわる恐怖や虚無感をぬぐいさせ、高齢

表5 高齢期の学習課題

1. 健康 ・身体機能の衰退への適応 ・健康管理 2. 家庭生活 ・ひとりぐらしの生活設計の確立 ・家庭における役割の発見 ・収入の減少に適応した新しい生活設計の確立 ・家庭内の人間関係の理解 ・財産の贈与、相続についての計画 3. 職業 ・退職後の生活のとらえなおし ・新しく自分を役立てることのできる場の発見 ・社会保障、医療、福祉制度についての理解 4. 余暇 ・同年齢の人々と親しい交わりをつくりだす ・「よろこび」をみいだせる活動へのとりくみ ・高齢期の学習についての理解	5. パーソナリティ（人格） ・「衰退」に立ちむかう精神力の確立（パーソナリティの「円熟」をめざす） ・自分の人生の受容 ・死に備え、今ある「生」をよりよく生きる価値観の獲得 6. 社会生活 ・急激な現代社会の動きについての理解 ・市民的義務の理解と実践 ・地域づくりへの参加 ・地域の歴史、文化の理解と伝承活動 ・ボランティア活動についての理解と実践 ・芸能、趣味を通じての高齢者文化の創成 ・世代間交流への努力 ・死生観が語られる社会の形成
---	--

期の生活に新しい「生きる価値」を知的認識として与える可能性に連がる。更に「心の健康」言いかえれば精神生活の充実という事からを学びたいという学習要求も高齢者にあるのだから、今後もっと多くの高齢者教育の場で「死を前にした今を切り開いていく」ための課題が採り上げられる事が望まれるといえよう。

4. 公的社会教育の高齢者教育における Death Education の可能性について

これまで高齢期の生活に適応していくためには、精神生活における様々な課題

の解決が必要な事を述べてきた。しかし、これらの課題は、従来の高齢者教育のように一開期中、一度や二度の学習で解決が図られるものではない。そこで健全な精神生活の営みをとすると阻む大きな要因としての死という現実を直視し、そこにおける様々な問題に取り組む事によって、残された日々をよりよく生きる英知を獲得することを目的とした Death Education が高齢者教育においては体系的に実施される必要性が生じるのである。

アルフォンス・デーケン⁹⁰は、死という現実を直視し、そこにおける様々な問題について考え、対処する視点を学習することは、「今をよりよく生きる事への新たな挑戦を始めることに連がる」と指摘している。彼は“Death Education”の実施を提唱し、そこにあって目指す教育目標を13項目挙げている。⁹¹1) 人が生涯を通じて、自分自身の死を準備し、自分だけのかけがえのない「生」を全うできるように死についてのより深い思索を促すこと。2) 悲嘆教育（配偶者の死に因る悲しみを克服する援助）、3) 死への極端な恐怖の緩和、4) 死にまつわるタブーの除去、5) 自殺の予防、6) 死と死のプロセスをめぐる倫理問題への認識の促進、7) 死に関わる医学や法律に関する理解、8) 葬儀の役割についての理解、9) 時間の貴重さを発見し、人間の創造的次元を刺激し、価値観の見直しと再評価をすること、10) 死の芸術の習得、11) 個人的な死の哲学の探求、12) 宗教における様々な死の理解を深めること、13) 死後の生命の可能性について考察すること、

ここで掲げられている10) の目標は、日本では余り慣じみがないが、これらの目標の中で1) 生と死の意義を問う、2) 悲嘆教育、9) 自分の人生に対する再評価、11) 個人的な死の哲学の探究、12) 宗教における様々な死の理解を深めること等は、そのまま高齢期の学習課題である「自分の人生の受容」「死に備え今ある『生』をよりよく生きる価値の獲得」の習得に貢献するものといえる。いかにして死に備え前向きな姿勢で生きるかという課題の解決においては Death Education の試みにおいて、死についてあらゆる角度から検討が迫られねばならないといえる。そこで高齢者教育の中で Death Education をとりあげる事が可能であることを明らかにするために一つの実例を紹介する。昭和61年10月より12月にかけて実施された足立区の区民大学における「にんげんを考える——これからの生と死——」という講座である。この講座の内容は表6の通りであるが、定員80名の講座には17名の60歳以上の人々が参加した。彼らの参加動機は表7にまとめたが、ここからは彼らが正面から死を見つめ考えることによって自分のこれからの生を真剣に切り開いていこうとする思いが窺われる。高齢者が対象だから「死」について触れる内容は避けて通らねばならないという懸念はもはや捨て去るべきではな

表6 第16期足立区区民大学一開催要項

主催 足立区教育委員会

「にんげんを考える」

—これからの生と死—

高齢化社会を迎え、人生80年時代といわれる今日、私たちの日常生活から死は、ほど遠いところにある感がしています。こうした中で、むしろ死をより直視していくことによって、生をより充実した豊かなものにしていけないのではないのでしょうか。

今期、区民大学はこの「生と死」の問題を多方面からとらえ、これからの「生と死」はどうあるべきか考えていきたいと思います。

回	月日	曜	内 容 ・ 講 師	
1	10/ 7	火	開講式・オリエンテーション	
2	10/14	火	生命科学の進歩と人間のいのち	公 開 講 座
3	10/21	火	死の社会的考察から —脳死・臓器提供・献体・葬儀—	
4	10/28	火	生きる権利・死ぬ権利と「わたくし」	
5	11/ 4	火	日本人の死生観 —民俗信仰を通して—	
6	11/11	火	私にとって生とは、死とは	
7	11/18	火	病院の生と死	
8	11/27	木	西洋美術にあらわれた死の思想	
9	12/ 2	火	「お葬式」を語る	
10	12/ 9	火	作家の死 —芥川～三島—	公 開 講 座
11	12/16	火	いま、少女たちは	
12	12/23	火	現在の死をどうとらえるのか 閉講式	

いだろうか。今日、医療のめざましい進展の上に人々の長寿も保たれているわけであるが、そこにおいては、「生」と「死」をめぐる複雑な構造がある。世論においても生死にまつわる話題が盛んに採り上げられている中にあって、現代は高齢者自らが自己の「生」について又、「死」について確固たる価値観を持っている事が強いられている時代といえる。

個人のライフにおける精神生活の根源的不安である「死」を考え「よりよい生」を考える課題は、今や個人の要求としてだけでなく時代の要請ともなっていると見えよう。ゆえに高齢者の場における Death Educaion の取り組みが広く実施されていかなばならないといえるのである。

表 7 足立区民大学

「にんげんを考える」—これからの生と死—の講座を受講した人たちの参加動機

(60歳代)

- ・これからの人間の生と死についてお話しを聞いてみたくて希望した。(69歳女)
- ・よりよき老後を営むために死といえるものの実態を探したいと思い。(62歳男)
- ・高齢化社会において老年の生と死の関心が深まってきたので。(66歳男)
- ・人間の生命の尊さを知るためと、自分の死に直面した時の心の準備のため。(62歳女)
- ・脳溢血の後遺症として半身不随の夫を看取る年月が20年、自らも乳ガンの手術により片方の乳房を削除、このような中にあって死とその後に来るもろもろの事柄を思い。

(67歳女)

- ・心筋硬塞という病で夫をなくし、その死をみとる中で、人間の生命のはかなさを感じずにはいられなかった。その経験を通して、生と死についてもう一度考えたいと思った為。(66歳女)
- ・現代に生きる者が過ぎてゆく日々にとって素晴らしいテーマだと思った為(64歳男)
- ・自分の人生の糧にするためと、遠くない人生の整理のため(60歳男)
- ・夫共々死の方へ近づきました。自分の人生をふりかえって何もありません。残り少い生を悔いなく終りたく、ジタしない死の日を迎えたいと考えて(65歳女)
- ・退職をし、今まで出来なかった勉強をしたいと思い(63歳女)
- ・生命科学についてもっとくわしく勉強をしたいと思った為(68歳女)
- ・講師の先生に魅かれて(60歳女)
- ・「生と死」というテーマが私達にとって重要なことであるにもかかわらず、今まで勉強する機会に恵まれなかったため(60歳男)

(70歳代)

- ・生きとし生けるもの避けては通れない厳粛な瞬間に対する心構えの準備の為(77歳男)
- ・生涯教育の一環として(70歳男)
- ・生死の問題は人生で最も大事なことで考えていたので(77歳男)

(80歳代)

- ・教養を高める為(86歳男)

表8 「よりよい生を求めて一人間の生と死について考える」

回	内 容	方 法	時間
1	オリエンテーション・死への準備教育とは —「死を正面から捉え、よりよい「生」について考えてみましょう—	講 義	2
2	人工長命時代における人間の命 —人工的な延命・脳死—	講義・討論	2
3	先人の「生」と「死」に学ぶ —晩年の良寛・一茶の姿—	講 義	2
4	朱新仲「人生五計説」に学ぶ —死生観について考えましょう—	講 義	2
5	自分史の作成 —これまでの人生を再評価しましょう—	講義・実践	3
6	死と法律 —遺言の作成・献体・臓器遺贈について—	講 義	2
7	悲しみからの脱脚 —親しい者の死から立ち直りましょう—	講 義 体験を聞く	2
8	日野原重明著『老いを創める』に学ぶ —生活のとらえ直しを図りましょう—	討 義	2
9	信仰と生活 —心の依り所をもう一度みつめ直しましょう—	講 義	2
10	私にとって「生」とは「死」とは —みんなで語り合ひましょう—	討 論	3

ここに高齢者教育における Death Education の試案を表8として提示した。各講義の目標は下記の通りである。

第一回：死についての深い思案を、又、死に関わって生じる問題を追求することの意義について学ぶ。

第二回：人工長命時代における人間の生の様々なあり方について知ること、自らの生命の意味について考察する。

第三回：その晩年において病と闘いながらも精神力によって人間としての生を全うした二人の人物をとりあげ、高齢期の生活を支える精神力の価値について考察する。

第四回：中国の朱新仲の「人生五計説」を用い、自らの死生観の確立の必要性を説く。

第五回：自らの歩んできた人生を肯定的に受容する事ができるように導く、ライフ・レビュー・セラピーのアプローチ。

第六回：自らの死を完結させる意味において残された者への配慮の必要性を説く。

第七回：専門家の具体的アドバイスや体験談を聞き、悲しみの克服の手掛かりを説く。

第八回：自分の死に備え、新たに生活のとらえ直しを図ることの必要性について学ぶ。

第九回：孤独感の高まりや死に対する恐怖をとり除く一つのカギとして信仰心について考察する。

第十回：これまでの議義を通して習得できた事柄について皆と話し合いの中で確認し、自分自身の生のあり方について価値観を確立することを目指す。

これらの試みは、一見、テーマにおいて多岐にわたる観を与えるが、全て「死」にまつわる問題へのアプローチを通じて、人間の「生」の意味について肯定的に考える視点を学習者に与える事を目的としたものである。

真の生きがいとは、生きる喜びといった感情的充実と、生きる価値を問う知的認識が獲得されてこそ成立するものであるという。Death Education の目指すところは、この「生きる価値」というものを徹底して追求し習得することにある。従って、高齢者が生きがいのある生活を実現する事を援助する機能を果たし得るものとして、今後、高齢者教育において Death Education が積極的に実施される事の必要性を筆者は確信する次第である。

引用文献

- (1) 『HANDBOOK 老年学』岩崎学術出版社、1975、p.375. (那須宗一執筆)
- (2) 稲生勁吾「高齢者教育の内容」(国立社会教育研修所研修資料58-17, 1984) p. 9.
- (3) 森幹夫『老いと死の対応』老人生活研究所、1986、pp.23～28.
- (4) 神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房、1980、pp.31～33.
- (5) 日高幸男1981年5月22日「高齢者の福祉と教育」座談会にて、於、国立教育会館、(財)全日本社会教育連合会主催
- (6) 『東京の高齢者学級』東京都教育庁社会教育部、1977、p.10.
- (7) 『老いのパラダイム』岩波書店、1986、p.29～30. (日野原重明執筆)
- (8) エーリッヒ・フロム『生きるということ』紀伊国屋書店、1984、pp.51～75.
- (9) ハヴィーガスト、R. J. 著 莊司雅子訳『人間の発達と教育』牧書店、1958、pp.295～301.
- (10) Knowles, M. S., The Adult Learner : A Neglected Species, Gulf Publishing Company, 1973, pp.146～148.

188 自由投稿

- (11) エリクソン・E. H. 著, 小此木啓吾 訳『自我同一性』誠信書房, 1983. pp.123.
- (12) Robert C. Peck, Psychological Development in the Second Half of Life, in Middle Age and Aging, B. Neugarten (ed.) : Univ. of Chicago Press, Chicago.1968, pp.82~92.
- (13) バーバラ・M・ニューマン&フィリップ・R・ニューマン著, 福留護, 伊藤恭子訳『生涯発達心理学』川島書房, pp.323~329.
- (14) 新堀通也「必要課題分析の理論わく」(国立社会教育研修所資料60-28. 1986) pp.22~23.
- (15) 三浦清一郎『成人の発達課題と生涯学習』ぎょうせい, 1982, pp.74.
- (16) Erikson. E. H, childhood and Society, W. W. Norton & Company Inc. 1950. pp.219~234.
- (17) 注(13)掲載書 pp.330.
- (18) 山本恒夫「高齢者教育の目標」(国立社会教育研修所資料59-2, 1984) pp. 1~13.
- (19) 越川正三「高齢者向け学習講座のテーマの設定とプログラム化に関する一研究」(全日本社会教育連合会『社会教育』1985) pp.11~18.
- (20) G・マルセル「存在論的秘義の提起と、それへの具体的な接近」(『技術時代における聖なるもの』マルセル著作集別巻春秋社, 1966,) pp.201~241.
- (21) 注(12)掲載書
- (22) 井上講四, 第七回日本生涯教育学会にて指摘, 1986.
- (23) 注(10)掲載書
- (24) アルフォンス・デーケン 1986年9月15日朝日新聞 「論壇」に掲載
- (25) 『死を教える』メヂカルフレンド社1986, pp. 6~43. (アルフォンス・デーケン執筆)